冒険遊び場づくり全国フォーラム 2018
×
オレンジリボンフォーラム 2018

開催記念
特別鼎談

地域×社会福祉＝居場所づくり

「受援力」を育み　地域ぐるみの　虐待防止へ

久米 隼（くめはやと）
1990 年神奈川県横浜市生まれ。立教大学大学院修了。日本社会事業大学で社会福祉・社会保障を学ぶ中で、地域のつながり・つながりの形成過程に関心をもち、冒険遊び場と出会う。2016 年より NPO 法人日本冒険遊び場づくり協会の理事を務める。2 児の父。

直島 克樹（なおしまかつき）
1981 年岡山市生まれ。関西学院大学・大学院では社会福祉学を専攻、専門は社会福祉に関する理論、ソーシャルワーク、地域福祉、子ども家庭福祉。現在は川崎医療福祉大学医療福祉学科に講師として勤め、AMDA こども食堂支援プラットフォーム事務局長、子どもを主体とした地域づくりネットワークおかやま代表などの活動も展開。3 児の父。

関戸 博樹（せきどひろき）
1981 年東京都生まれ。東洋大学で社会福祉を学び、地域住民が子どもたちの遊び場をつくることで人がつながりまちが元気になっていく冒険遊び場づくり活動に地域福祉のモデルを見出し、現在はフリーランスのプレイワーカーとして全国の遊びに関わる団体の立ち上げ支援や人材育成に関わる。2008 年より NPO 法人日本冒険遊び場づくり協会の理事を務める。2 児の父。

本フォーラムのテーマ「居場所づくり」に関わっておられるお三方の共通点は「大学で社会福祉を勉強してきたこと」です。そのきっかけと今の活動について教えてください。

久米
僕は大学で社会福祉を学び、途中から NPO 業界に入っていき、子どもの虐待防止の活動に関わるようになりました。その中で、地域全体で子育てをするということが、虐待防止につながるという気づきがありました。そして、地域の子どもの居場所のひとつとしての冒険遊び場、それを地域の住民が作り上げているということに非常に魅力を感じたんですね。それが「日本冒険遊び場づくり協会（※1）」で活動をするきっかけであり、今回の全国フォーラムを企画することにもつながっています。

直島
僕の大学での専門は「子どもと地域福祉」という分野なのですが、4 年間ずっと障害者の在宅介護に関わり、大学院に入ってからは認知症高齢者の分野にも関わって、最終的には児童養護施設で働くことになりました。元々、高齢者・障害者、さらには子どもも含め、虐待の問題に関心を持っていたんです。児童養護施設での経験は、自分の価値観のつくり直しでしたね。虐待、貧困、障害、DV、就労など問題は複合的で、地域や社会自体が変わらなければと思う日々でした。そんな中で地元岡山の大学が声をかけてくれ、大学だから出来ることに挑戦してみようと思いました。大学では、地域の福祉力・支えあいをテーマに、5 年前から倉敷の美観地区で地域づくりの活動に関わっています。はじめは、地域づくりと言っても地域の人の関心が、独居高齢者の見守りとか、高齢者の問題だけだったんですがそこに入りながら学生と活動していくと、だんだん他の地域課題も見えてくるわけです。すると、学校に行けていない子ども、夜ひとりで過ごしている子どもの存在が見えてきて、そういう子どもたちだって放っておけないよねということになって、それで始めたのが今やっている「倉敷トワイライトホーム（※2）」です。そこで子どもたちと関わっていたら、ずっと家にいる、家でゲームばかりしている、家以外での体験が極端に少ないということがわかってきたので、学生たちが中心になって、この活動では子どもたちが地域の中で好きな遊びを見つけてできるようにサポートすることを柱にしています。この活動をはじめたことで、岡山県内の居場所づくりや子ども食堂の活動のネットワークをつくり、ノウハウや情報をシェアしてつながっていけたらいいな、という思いが生まれて、そういった取り組みもはじめたところです。

関戸
僕は、幼い頃に祖父母といっしょに暮していたこと、母親が後天性股関節脱臼の手術後に障害者になったこと、また、自宅の前が大きな福祉施設だったことが子どもの頃の原風景になっています。自分にとって一番身近な“働く大人”が福祉の分野の人たちだったというのは影響が大きかったと思います。小学 5 年生ですでに社会福祉の仕事に就くという将来像を持っていました。

一同
すげー！！

関戸
まぁ、中学・高校時代にサッカーにうちこんだけど、なかなか日本代表に呼ばれないっていうのもあって（笑）大学に進学して社会福祉を専攻しました。聴覚障害の分野に興味を持って、施設実習に行ったことがひとつのターニングポイントです。施設の中では職員さんも暮らしている人も、1 日の内にやらなければならないことをこなすという日々で、誰もやりたいことをやっていない。それに愕然としたのです。しかし、たまにガイドヘルパーさんと外出できる人がいるのですが、映画・買い物・電車に乗りたい・電車の写真を撮りたい等々、それに出かけて帰ってきた人たちの様子が違うことに気が付きました。1 日施設にいてなんとなく過ごすような日と、自分のやりたいことをやって帰ってきた日の、みなさんのエネルギーが全然違う。そこで、僕は仕事として「人のやってみたいことを実現する」という福祉を目指したいと思うようになりました。そして、「やってみたいこと」はまちの中にあると感じたので、まちの中、地域の中で、福祉の実践ができないか？と考えていました。そんな時に出会ったのが「冒険遊び場」です。地域の中で地域の人たちが子どもたちの「やってみたい」を実現する遊び場をつくる、これはすごい社会福祉のモデルだ！と思い、この世界に飛び込んで今に至ります。

直島
原風景と言えば、僕は子ども時代を岡山市内で過ごして、岡山大学のキャンパスやこどもの森を遊び場にしていました。あとは、田んぼで野球したり。まだそういうことができる時代でしたね。そして、我が家は「子ども食堂」なんて銘打ってないけれど、みんなが集まる家だったんです。母親が「みんな食べていけばいいじゃない」って、友だちが夕食を食べて帰っていくような家でした。

関戸
僕も、子ども会や町会の活動に参加しながら汗を流す親の姿を見ながら、かっこいい、あんな風になりたいと思っていました。

久米
僕はむしろオヤジみたいになりたくないという反抗心で福祉の世界を目指しました（苦笑）。僕の父親は朝早く帰りは遅い、家庭は放置という典型的な仕事人間でした。でも、そのかわりに地域の八百屋のおじさんとかコロッケ屋のおばさんに育ててもらったという記憶が鮮明に残っています。それが子どもの頃の遊び、そして地域というものの原風景になっていますね。

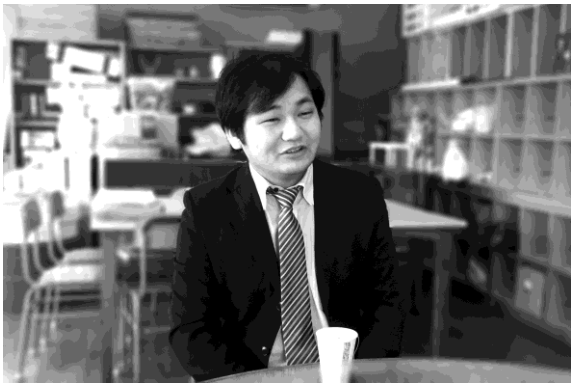
直島
当時は、すごく個性的でおもしろい先生なんかもいましたね。教室を全部迷路にしてしまったり、図工室がなぜか離れになっていたり（笑）理科の実験の時に、ガスバーナーと空き缶で炊飯をして食べたことなんかもよく覚えています。

親・先生・地域の大人…多様な人たちに囲まれて育ったことがみなさんの原風景になっているのですね。今の子どもたちにはそういう地域社会でのつながりがあるのでしょうか。

直島
なかなか難しくなりましたね。いろいろな地域を見てきましたが、例えば、統廃合が進んで学校がなくなるとコミュニティが衰退してしまいやすいですね。小学校が地域のコミュニティにとってひとつの大きな役割を果たしている、これはどこでも言えることでしょう。そして、コミュニティが衰退してしまったところは確実に子ども会という、地域の子どもが寄り集まる機能がなくなっていきます。

久米
地域で活動している人たちはよく「まちに子どもたちがいなくなった」と言っていますね。首都圏では私立も含めて学校が選べるようになっているので、学区内に学区内の子どもがいない、生活していないということになります。教育の選択肢が増えたというのはいいことでもあるけれど、学校以外での子どもの育ちを考えた時、地域と全くつながっていない、地域の中で育つことができないというのはどうなのかなと思ってしまいます。

関戸
僕らの子ども時代に残っていた物理的な地域でのコミュニティは保ちにくくなり、今は広域的で目的別のコミュニティがつくられるようになってきていると思います。例えば、冒険遊び場づくり活動で言えば「子どもが外で自由に遊ぶ」ということに価値を感じる人が、同じ目的の人と遠くからでも集まってコミュニティをつくっています。昔、「隣三軒両隣」という感じで地域の中でつくられてきた人間関係が、人口減、子どもの数の減少で当たり前には築きにくくなっている、だからこそ意識的な「場づくり」が必要だと感じます。子どもと子ども、人と人とがつながれるきっかけづくりとして、子ども食堂や冒険遊び場のような「場」があることが重要なんです。



直島
場をつくることは人の動きをつくるということです。課題を抱える地域は人の動きが止まっているんです。場ができると、人と人が出会い、動き始めます。冒険遊び場の魅力は「遊び」が中心にあるということだと思います。子どもが子どもを次々巻き込んでいく可能性があるじゃないですか。虐待防止の観点から言うと、子どものつぶやきを拾うということはとても重要です。実は、子どもは子ども同士の中で情報交換をしていて「あの子が…」なんて教えてくれることがあります。それがうまくつながって、虐待の通告につながった事例もあります。子どものつぶやきを拾うには地域密着が大事だし、普段の関わりをしっかり意識しなければなりません。

関戸
食べていない、洋服が変わってない等ということが、日常の暮らしの最前線である遊びの場で見えてくるということはありますね。それには、冒険遊び場というひとつのスタイルだけでなく、道で遊ぶとか公園で遊ぶとか、そういうことをもっといろんな形で展開して、子どもが一人で遊びに出られる地域をつくっていきたいと思っています。
直島
「遊び」って、子どもだけでなく大人も高齢者も楽しく関われますよね。さらに、冒険遊び場にはそこに住んでいる人だけでなく、遠くからでもわざわざ遊びに来る人がいて「関係人口」も生むじゃないですか。そうやって多くの人が関わるということは、それだけで子どもへのメッセージになります。大人が見守ってくれているということを意識的にも無意識にも感じて育つ、これはとても大事なことです。大人になってから困った時に相談できない人は、幼い時から人に頼る経験が少ない、または子どもなりに SOS を出していたけど気付いてもらえなかったという感覚を持っています。状況がひどくなるまで、またはひどくなっても相談できなくて孤立している大人は多く、せめて子どもの時に誰かに頼ってもいいんだと感じられる機会が保障されていれば…と思います。これは速攻で効果が出ない、10 年 20 年先に結果が見えてくることですが、冒険遊び場のように多くの大人が関わって子どもたちを見守る場があることは「受援力（※3)」を身につけるということにつながっていると思います。例えば、虐待してしまいそうな時に相談できる人を育てるという意味で、虐待防止にもつながっていますね。

久米
冒険遊び場は「福祉サービス」ではないことが魅力です。福祉の相談窓口より話しやすい、立ち話で解決、みたいな。地域にそういう場所がある、人がいるということで救われる人は多いのではないでしょうか。このことは子ども虐待を未然に防ぐことにもつながっていきます。

居場所づくりと虐待防止の関連性を語る時、大人にも子どもにも「受援力」を育むという視点が核になりそうですね。続きはぜひ 6 月 17 日の全国フォーラムで！ありがとうございました。

※1　日本冒険遊び場づくり協会
「遊びあふれるまちへ！」をミッションに冒険遊び場（プレーパークとも言う）づくり活動を推進する NPO 法人。所在地は東京都世田谷区。

※2　倉敷トワイライトホーム
川崎医療福祉大学の卒業生が立ち上げた「（一社)子どもソーシャルワークセンターつばさ」の運営による居場所づくり活動。

※3　受援力
他者に助けを求め、快くサポートを受けとめる力。元は災害ボランティアを地域で受け入れるためのキーワードとして内閣府が言語化したもの。

冒険遊び場づくり
全国フォーラム 2018
×
オレンジリボンフォーラム 2018

みんなの居場所
冒険遊び場の可能性

子ども虐待防止とすこやかな成長のための役割

2018 年 6 月 17 日（日）
10：00～15：30
岡山大学創立五十周年記念館

10:00～12:00　オープニング＆パネルトーク

13:00～14:30
グループワーク
▼冒険遊び場と子育て支援
▼学童期の多様な居場所づくり
▼青年期までの切れ目のない支援
▼冒険遊び場づくりをはじめよう

14:45～15:00　クロージング

【ステージ出演】
認定特定非営利活動法人児童虐待防止全国ネットワーク
くらしき作陽大学、一般社団法人ぐるーん
【ブース出展】
岡山大学、川崎医療福祉大学、備前市教育協力隊
一般社団法人子どもソーシャルワークセンターつばさ　他

本フォーラムの情報は
f acebook イベントページに
随時アップされます！

参加エントリー開始は
４月頃を予定しています